

田中伊佐生

1. 事業実施の目的

記述言語学の視点から土家語の構造を明らかにするための基礎調査

2. 実施場所

中国湖南省湘西土家族苗族自治州龍山県

3. 実施期日

2019年4月29日（月）～2019年5月7日（火）

4. 成果報告

●事業の概要

中国湖南省湘西土家族苗族自治州龍山県の山間部農村において、土家語北部方言の一変種を記述するための基礎調査を行った。具体的には、この土家語変種の話者に聞き取りを行い、語彙データを収集・記録した。この成果に基づき、調査対象とする土家語変種の音韻体系を把握し、表記法を決めるための分析を進める。今回の調査では、471語を収集し、語形の書き取りを行い、そのすべてのデータを録音により記録した。なお、調査の概要は以下のとおりである。

1. 調査方法

調査に先立ち、身体部位、呼称、動植物など生活に密接する語を中心に語彙調査票を準備した。まず、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下「AA研」と略記）の『アジア・アフリカ言語調査票 下』（AA研 1979）から431語を選択した。次に、AA研のウェブサイト公開されている『言語調査票 2000年版』（AA研 2000）のエクセルファイルから、この431語に係る項目を抽出した。さらに、「牛」には「黄牛」や「水牛」というように、現地の土家族の人に身近な動物など、可能な場合には現地の状況を加味して下位語を加え、500語の語彙調査票とした。なお、『言語調査票 2000年版』（AA研 2000）には日本語と英語の表記しかないため、『アジア・アフリカ言語調査票 下』（AA研 1979）の漢語拼音方案による表記を参考に、中国で「国家通用言語」とされている「漢語普通話」で使用される対応語を本調査の語彙調査票に付した。

この語彙調査票を用いて、調査対象とする土家語変種が話されている龍山県山間部の農村に滞在し、60代の話者1名から、漢語普通話を媒介言語として聞き取りを行い、この土家語変種の語彙を収集・記録した。

2. 調査中に得た音韻に関する仮説

実際の発音には[l]と[n]が存在するが、音素としての対立はないという仮説を得た。また、

ブラセットら (Braslett *et al.* 2006:25-26) は、龍山県坡脚郷、靛房郷、他砂郷で話される土家語において、[rɜŋ]と発音する漢語からの借用語にのみ[r]はあらわれるとしている。一方で、報告者は、対象とする土家語変種においては、[rɜŋ]と発音する語以外でも[r]はあらわれると考えている。これらの点を含めて、対象とする土家語変種の音と音素の特定にはさらに分析が必要である。

声調については、少なくとも3段階の調値と4種類の組み合わせが音韻的な対立を担うという仮説を得た。つまり、調値を「高」、「中」、「低」で表すと、「高→高」、「中→高」、「中→低」、「高→低」という少なくとも4種類の声調が存在するという仮説である。

今後、収集・記録した語彙データを分析する際には、これらの仮説の検証も行い、音韻体系を明らかにし、記述のための表記法決定につなげる。

3. 収集・記録した語彙データの活用

収集・記録した語彙データを整理・分析した上で、音素目録を作成し、その目録を基に表記法を考案するとともに、語彙リストの作成も行う。

4. 語彙の収集・記録に関するその他の所感

今回の調査で最終的に聞き取りができたのは、471語だった。語彙調査票中の500語のうち聞き取りができたのは410語だったが、生活に密接する語を中心に調査した結果、ある語を聞き取ろうとすると、協力者である話者の方から関連する語が提示されることがあり、語彙調査票に入れていなかった語も収集できた。今後の語彙収集では抽象概念を表す語彙の聞き取りが増えるが、今回の経験を活かし、生活に密接する語を織り交ぜ、円滑に聞き取りが行えるよう工夫する。一方で、日本語や漢語普通話に存在しても、調査対象とする土家語変種には存在しない語があることがわかった。「心」、「神」、「影」、「右」、「左」などがそれに当たる。例えば、「神」については、漢語普通話の「神」にあたる語はないが、実際の生活の中では、調査対象とする土家語変種での「鬼」が日本語での「神」に近い意味で使われるように感じた。これらの語は、現地社会における世界観が反映される意味的範疇に属すると考えられるため、今後、この言語にどのような語と概念が存在し、どのような文脈で用いられるのか、についても調査を進めていきたい。

5. 言語使用状況について新たにわかったこと

調査地域において、日常、土家語を話す人は60代以上の高齢者に限られている。しかし、50代以下の人には土家語を全く話したことがないというわけではない。実際に、40代の人から、幼少期には土家語を話していたと聞いた。その人は、今は土家語を忘れて話せないと言っていたが、話者が話す土家語を聞いて、今回の語彙調査票中のいくつかの語は理解していた。今後、言語使用についても調査を行い、現地の状況を把握するとともに、より幅広い年齢層からの言語データ収集の可能性を探る。

参考文献

Brassett, Cecilia, Philip Brassett and Meiyun Lu

2006 *The Tujia Language*. Muenchen: Lincom Europa.

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研)

1979 『アジア・アフリカ言語調査票 下』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 1967 の再版。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研)

2000 『言語調査票 2000 年版』の公開

http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/query/aaquery-1.htm

(閲覧日：2019年6月6日)

●本事業の実施によって得られた成果

今回の調査で、対象とする土家語変種の語彙 471 語を収集・記録したことにより、その音韻体系を把握し、表記法を決めることが可能となった。また、語彙データ収集の協力者から、次回調査への協力も承諾してもらえた。次回の調査では、形態素リストの作成、音素目録と語彙リストの修正に資する 1,000 語程度の語彙データを収集・記録する予定である。

●本事業について

本事業は、博士課程の研究に必要なデータ収集の機会を提供する点において、極めて有益なものを実感している。本事業が継続されることを切に希望する。